関連学会印象記

第39回日本移植学会総会

中　谷　武　嗣*

我が国で臓器移植法が制定されてから6年目にあたる昨年10月26日から28日にかけて，大阪国際会議場において北村惣一郎会長のもと第39回日本移植学会総会が開催されました．日本移植学会が扱う領域は，移植の基礎研究から各臓器移植の臨床，さらには異種移植，組織移植，移植システムと多岐にわたります．このため，参加者は多方面におよび，基礎研究に従事する研究者から移植の臨床現場で活躍する医師，コーディネーター，看護師，さらには移植患者が参加し，総出席者は1200名に及びました．1999年に脳死下での臓器提供による臓器移植が施行されてから，徐々に脳死臓器移植の施行数が増加していましたが，2003年は脳死下での臓器提供が少なく，心臓移植も2002年12月末から行われていませんでした．このような状況のなか今回の移植学会総会は「移植：社会に貢献する医学・医療」をメインテーマとしてプログラムが構成されました．

学会初日の10月26日には「移植：今，あなたと私にできること」と題した市民公開講座が開催されました．まず「子供達の移植への道」と題して，国立循環器病センターで左心補助人工心臓(LVAS)装着後に米国にて渡航移植を受けた小児心臓移植者およびその母が体験談を述べ，さらに「小児のドネーションについての取り組み」と題した日本小児科学会報告が行われ，日本小児科学会も積極的に我が国における小児脳死臓器移植実施に向けて活動する姿勢が示されました．次いで脳死臓器移植の現状として，国立循環器病センターにおいて心臓移植を受けた二人の方が，初めて公開の場で移植前および移植後の体験談に加えて，復職されている現状も話されました．また，国内での脳死肺移植者に加え，国立循環器病センターおよび大阪大学のレシピエントコーディネーターによる各々の施設における移植待機者および移植者の現状が報告されました．さらに，臓器提供家族の方からも発表があり，300人の出席者に我が国の移植を取り巻く現状が報告されるとともに，今後の問題点も示されました．

10月27，28日に行われた総会では，400題を越える応募演題が7会場とポスター会場にて取り上げられました．シンポジウムは3題あり，最適な免疫抑制を行う上での問題として「免疫抑制剤の至適モニタリング」が，長期予後改善に大きく影響する問題として「慢性拒絶反応の発現とその予防」が，各々取り上げられました．さらに「我が国における脳死臓器移植の定着化における問題点」について行政の立場からの発表も含めて討論がなされました．また，パネルディスカッションとして最近施行数が急増している生体移植における「生体ドナーからの臓器提供」に関して，医師，クリニカルコーディネーター，精神科医および法学者が加わり，検討がなされました．要望演題は6テーマが取り上げられ，移植における問題点である「免疫制御の今後」と移植手術での問題点である「臓器保存液の選択と虚血性再灌流障害による臓器不全」について実験的および臨床経験による検討が多臓器においてなされました．また，心臓移植待機中における補助人工心臓によるブリッジなど移植医療に欠かせない人工臓器に関して「臓器移植における人工臓器の利用」が，さらに近年研究が急速に進められている再生医療と移植について「再生医療から臓器・組織移植医療へのアプローチ」と題して10題の種々のテーマに関する発表があり，今後の移植医療における発展が期待されました．今回のトピックスとして，現在我が国では

*国立循環器病センター臓器移植部

Presented by Medical*Online

15歳未満の小児のドネーションができないことより脳死小児移植が閉ざされている現状について「小児移植」として取り上げられました．この中で，渡航移植も含めた小児臓器移植の現状の報告と問題点の検討がなされました．また，これまでは腎臓移植が中心でしたが，心臓や肺を含む多臓器におよぶようになり，また生体移植も肝臓や肺で多く行われるようになり，レシピエントコーディネータも増加し，さらに看護部門の関与が重要となってきている現状について，「移植看護」として取り上げられ，今後の看護職の移植医療へのかかわりかたなども含めた討論がなさされました．

海外からの招請講演は8題あり，心臓移植における免疫抑制，心臓移植と人工心臓，肝臓及び小腸移植における最近の進歩，造血幹細胞移植の現状と今後，生体肺移植における成長に加え，免疫寛容，異種移植および細胞移植に関して世界の最先端の実情と今後の方向性が報告されました．また，教育講演の一つに我が国で開発され，現在基礎免疫抑制剤として世界中で広く用いられるようになったタクロリムスの開発とその臨床応用が「免疫抑制剤タクロリムスに見る創薬と育薬の実践」と題して行われました．今後も我が国初の免疫抑制剤を開発することの重要性とともに，臨床医も含めた開発体制の確立の必要性も示されました．

移植医療を広める上で重要な移植者やコメディカルあるいは新たにこの分野に参加してきた医師，研究者を対象とした教育セミナーでは，27日にまず現在我が国における第一線で担当しているエキスパートによる各臓器移植の現状と今後の展望に関する講演が行われました．最終日の28日には，今回初めて「待機中および移植後の管理」と題し各臓器のレシピエントコーディネータによる講演とディスカッションが行われました．また，最後のセッションでは「移植者からみた移植医療」をテーマとして，各臓器の移植者が参加し，我が国における移植医療の問題点が検討されました．この二つのセッションの間に上記の要望演題「移植看護」が行われたこともあり，この会場では今の移植の現状の把握に有意義でした．

一般演題での今回の特徴は，生体肝移植が多数例多くの施設で行われるようになったことを反映して，16のセッションで肝臓移植に関する口答発表が行われ，腎移植の17セッションと匹敵するようになりました．

最後に，今回は韓国の移植医との積極的な交流を目指して「日韓移植フォーラム」が併設して行われました．これまで，腎臓および肝臓移植では交流が行われてきましたが，日本移植学会総会併設とし，フォーラムの抄録も初めて移植学会総会の抄録集に組み込まれました．さらに今回は心臓移植も取り上げられ，最終日の午後に日韓両国における心・肝・腎移植に関する「日韓移植フォーラムシンポジウム」が第一会場で開催されました．今後，移植特に臨床面での日韓の交流が深まることが期待されました．

移植医療は，ドネーションがあり成り立つ医療であり，市民公開講座や移植者も含めたプログラムなど移植の現況を社会に提示する総会であり，本総会が臓器移植をみなおすきっかけになることが期待された．

Presented by Medical*Online